

し血液、腎臓、骨への取り込み率は ^{67}Ga よりはるかに大きかった。 Pb-203 は肝臓、脾臓、肺、小腸などへの取り込み率も ^{67}Ga より小さく、腫瘍描画剤として有望と考えられた。

16. $^{99\text{m}}\text{Tc-PMT}$ が塞栓術後の経過観察に有用であった肝細胞癌の一例

木造 大夏 外山 宏 竹下 元
伊藤 清信 江尻 和隆 前田 壽登
高橋 正樹 竹内 昭 古賀 佑彦
(保衛大・医・放)

リビオドール動注および肝動脈塞栓術(以後 Lip-TAE)を3回にわたって行った肝細胞癌の症例で、その前後に $^{99\text{m}}\text{Tc-PMT}$ シンチグラフィ(以後 PMT)を施行した。PMTは Lip-TAE直後のCTでは良好な Lip 沈着のため同部の壊死の有無の判定が困難な病変部に一致して hot spot を認め腫瘍残存が疑われ、Lip-TAE後CTの欠点を補う場合があることが示唆された。また Lip-TAE後のCTで描出が不明瞭であった再発腫瘍、CTで描出された再発腫瘍の一部に明瞭な集積を認め経過観察に有用であった。しかし、CT、血管造影では描出される小さな腫瘍の描出はなく、主にガンマカメラの分解能とバックグラウンドとの重なりが原因と思われた。

17. Legg-Perthes 病における骨シンチと MRI の比較検討

大島 統男 伊藤 健吾 深津 博
佐久間貞行 (名古屋大・放)
吉橋 裕治 (同・整)

今回、臨床的ならびに X-P にて診断のついた Perthes 病の初期病変につき骨シンチと MRI を同時期に施行し比較検討する機会を得たので報告する。対象は年齢6～12歳、男性10、女性2の計12例である。骨シンチは小型ガンマカメラにピンホールコリメータを使用し撮像した。MRIは GE 1.5 テスラ、Picker 0.5 テスラなどを使用し、 T_1 強調、 T_2 強調画像を得た。

結果は、骨シンチ、MRIともに Perthes 病の初期病変を検出できた。X-P 上の壊死期では骨シンチは欠損を示し MRI は低信号を示した。硬化期では骨シンチで

lateral column が描出され、同部位は MRI の T_2 強調画像で high-intensity を示した。骨シンチは壊死部位と revascularization の鑑別が容易であり、一方 MRI では骨シンチでは不明の骨頭の解剖が詳細に描出された。

18. 骨シンチグラフィによる透析患者における異所性石灰沈着の検出

高瀬 秀子 金沢 裕之 辰田 昇
松田 昌夫 関 宏恭 大口 学
東 光太郎 奥村 哲郎 宮村 利雄
山本 達 (金沢医大・放)
石川 勲 (同・腎内)

透析患者にける骨外性集積の部位とその頻度、および、骨シンチグラフィにより検出された透析患者の異所性石灰沈着の単純撮影、CTによる検出能について検討した。透析患者217例中19例(8.8%)に骨外性集積を認め、その部位は、腎臓14、肺7、血管壁7、軟部組織5、胃2、心臓2、計37集積であり、腎臓と肺の組み合わせが19例中6例(32%)と最も高頻度であった。骨シンチグラフィで骨外性集積として認められた37部位のうち、単純撮影で石灰沈着が検出できたのは18部位(49%)であった。CTが施行されたのは37部位中18部位であり、CTで石灰沈着が検出できたのは12部位(67%)であった。すなわち、単純撮影あるいはCTでは検出できない異所性石灰沈着を骨シンチグラフィで検出することが可能であった。

19. 昇圧時における正常筋肉血流の反応

—— ^{133}Xe クリアランス法による測定——

瀬戸 幹人 分校 久志 利波 紀久
久田 欣一 (金沢大・核)
杉原 信 土屋 弘行 富田 勝郎
(同・整形)

悪性腫瘍の昇圧化学療法においては、正常組織と腫瘍の相対的血流比が変化すると考えられているが、昇圧時の正常筋肉血流変化を検討することを目的として、 ^{133}Xe 生食液筋注クリアランス法にて5例の上肢筋血流を測定した。被検者の安静時収縮期血圧および心拍数は 104 ± 10.9 (mmHg) および 70.4 ± 3.3 (beats/min) に対し、昇圧